

## デューラー研究 第31

## 文献記録におけるデューラー (1)

Dürer and Posterity (1)

美術学科

下村 耕史

a translation by Koji SHIMOMURA

## 序

ドイツ・ルネサンスを代表する画家アルブレヒト・デューラーAlbrecht Dürer (1471-1528) に関する文献記録は彼の生存中から今日まで続いている。これはデューラーの活動期から現代に至るまで、彼が芸術家として不朽の名声を保持してきたことを意味する。芸術家の名声は個人の能力をどのように重視するかという時代の姿勢に左右される。個人の能力を無視する時代では名声は起こり得ないからである。イタリアで人文主義が勃興し始めた時期に、ジョットは活躍し名声を得、今日までそれを保持している。デューラーはゴシック美術後期に画家として活動を始め、イタリアに遊学して人文主義的美術観に目覚めて、ドイツ・ルネサンスと呼ばれる一時期を画した。彼の芸術作品と理論的著作はドイツだけでなく以後の西洋文化に大きな影響を及ぼしている。しかしデューラーが五世紀に亘って人々に芸術的感銘を与えてきた内容は必ずしも同一でないはずである。そしてどのような点で人々はデューラーに感銘をうけたかは、彼に関する文献記録から窺われると考えられる。このような趣旨から本稿ではできるだけ多くの記録の翻訳が試みられた。

使用したテキストおよび参照文献は以下のようである。なお( )内は本文中の略称である。

1. *Dürer und die Nachwelt, Urkunden, Briefe, Dichtungen und wissenschaftliche Betrachtungen aus vier Jahrhunderten. Gesammelt und erläutert von Heinz Lüdecke und Susanne Heiland.* Berlin 1955. (*Dürer und die Nachwelt*)
2. *Dürer Schriftlicher Nachlass. Herausgegeben von*

*Hans Rupprich. Erster Band,* Berlin 1956. (R.1)

3. Jan Bialostocki: *Dürer and his Critics,* Baden-Baden 1986.(Jan Bialostock)
4. Joseph Leo Koerner: *The Monument of Self-Portraiture in German Renaissance Art,* Chicago & London 1993. (Koerner)
5. 前川誠郎著『デューラー 人と作品』、講談社 1990年。(前川)
6. 秋山聰著『デューラーと名声—芸術家のイメージ形成—』、中央公論美術出版、2001年。(秋山)

## A. ドイツの人文主義者と宗教改革者

1. Conrad Celtis (1459-1508) :

Conrad Celtis' manuscript in Kassel (Landesbibliothek, Ms.poet.fol.7), written in c. 1499 or 1500. Jan Bialostocki, *Dürer and his Critics*, pp.17.

著者コンラート・ツェルティスConrad Celtis (1459-1508) はドイツの代表的人文主義者でラテン詩人。以下に訳出された詩はおそらく1499年か1500年頃に書かれたもので、1967年に初めて公にされた。現在カッセルの州立図書館に保管される。

「ニュルンベルクの画家アルブレヒト・デューラーよ。ドイツの国における最も高名な画家アルブレヒトよ、フランク族の都市がその誇り高い頭を星々の方に挙げるところでは、我々にとって汝は第二のフィディアス、第二のアペレス、古代ギリシアがその卓越した手のために称える芸術家なのである。イタリアも多才なフランスも彼に匹敵する人物を見出さず、スペインでも彼のような人

物を誰も見出さないであろう。ハンガリー人もドイツ国内の居住者も黒海沿岸で栄える人々も、汝は遠く引き離す。

汝は我々の著作の哲学〔の扉絵〕を描く。天が下のすべてのものは汝のために作用するであろうことを知りなさい。

飼っていた犬のことを考えてもみよ。奇跡の才能を賦与されたアルブレヒトよ、絵筆でデッサンに色を付与するその巧みさよ、彼が頭から足指まで自分の姿を素早く描くや否や、犬がその絵を主人と間違えて走りより、体と顔をくっつけてじゃれつくのであった。<sup>(1)</sup> (挿図1)

注(1): 「ギリシア詩華集」(“Greek Anthology”) (9:604)

に掲載される女流詩人ノシス (Nossis) の詩に、飼い犬が絵を主人と間違える話が詠われる。

「これはタウマレタの絵である。優しい眼をした婦人の物腰と美を画家はなんとよく描いていることか！女主人を見ていると思ひこんで、そこにいるかのよう、ペットの子犬が汝にじゃれつくのであった。」

## 2. Jacob Wimpfeling (1450-1528):

Aus “Epithoma Germanorum” (1505),  
*Dürer und die Nachwelt* S.17. R.1.290.

著者ヤーコプ・ヴィンプフェーリンク Jacob Wimpfeling (1450-1528) はドイツの人文主義者で司祭。訳出された文は彼の代表的著書『ドイツ史略』(シュトラスブルク1505年刊)の一節。

「彼〔マルティン・ショーンガウアー〕の弟子アルブレヒト・デューラーは、彼も上部ドイツ人であるが、この時代に特に傑出しており、ニュルンベルクで最も完全な絵を描いた。それらの絵は商人によってイタリアに運ばれ、当地の最も定評のある画家たちによって、パラシオスやアペレスの板絵と同様に高く評価された。」

## 3. Lorenz Beheim (ca.1457-1521):

Aus einem lateinischen Brief vom 7. März 1507 [Bamberg] an Willibald Pirckheimer.

*Dürer und die Nachwelt* S.17. R.1.253.

著者ローレンツ・ベーハイム Lorenz Beheim (ca.1457-1521) は、占星学者、医者、化学者、教皇アレクサンドル六世の秘書官で軍事顧問。訳出されたラテン語による三通の手紙は、1507年にデューラーの親友ヴィリバルト・ピルクハイマーに宛てられたものである。

「アルブレヒト・デューラーによろしくお伝え下さい。私に返事をくれるように、私の名前で彼を促してください。復活祭前にあの絵を仕上げることをとにかく望みます。彼が美しい鏡を買ってきてくれたことは嬉しかったです。ああ、たとえ我々が鏡のなかをのぞき込んでも、我々は美しくみえます！君の言葉を読んだとき、笑いをこらえることができませんでした。彼はいまでもあの変な形のいやなひげをしているとのこと！ついまた笑ってしまいます。」

4. Lorenz Beheim : Aus einem lateinischen Brief vom 19. März 1507 [Bamberg]  
an Willibald Pirckheimer. *Dürer und die Nachwelt* S.17f. R.1.254.

「我々のアルブレヒトに関しては、およそ彼が自分でそのことの準備をしておれば、彼に懇願する必要はないと思います。私も実際大きなあるいは骨の折れる仕事を望みません。私はただ、私が先の手紙で彼に描いてみせたような、何か古代的なところのある素描が欲しいのです。しかし彼が毎日ひねってカールさせている、雄猪の歯のようにとびでている尖ったひげ (Schnabelbart) がそれを妨げるのです。彼の徒弟が彼のひげを嫌がっているのを、私は知っています。それで彼はたいいていにして顔が滑らかにみえるようにすべきです。」

5. Lorenz Beheim : Aus einem lateinischen Brief vom 23. Mai 1507 [Bamberg]  
an Willibald Pirckheimer. *Dürer und die Nachwelt* S.18f. R.1.254.

「私は我々のアルブレヒトのために彼の誕生のホロスコープ (黄道十二宮) を算出して、彼にそれを送りました。彼自身がそれを貴方にみせるでし

よう。全てが一致しているので、私としてはそれはよく調整されていると思います。彼には昇る宮として獅子があります。それで彼は痩せています。その端に幸運の女神の輪があるので、彼は金持ちになります。絵画の天才の故に、水星が宮にいますので、なおさらそうです。その上水星が金星の宮にいますので、彼は繊細な画家であり、反対に金星が水星の宮にいますので、彼は精神の恋人〔もしくは有能な恋人 *ingeniosus amator*〕なのです。金星は土星と切り離されています。それでそれらは相互にいわば敵対しています。だがそのことは何も多くのことを意味する訳ではありません。二重の形をした徴のなかの月の方に金星は向いているので、彼は多く〔の女性〕を求めます。だが月は竜座の尾の方に向いているので、それは月が欠けていくことを意味します。五つの惑星が天の中央にあるので、彼の業績と仕事は誰の眼にも明らかです。火星が白羊宮にいますので、彼（デューラー）は武器を喜びます。彼（火星）が第九宮にいますので、彼は旅が好きです。木星が実体の宮（*in domo substantiae*）にいますので、彼は貧しくはなりません。だが木星が乙女座で下りようになるので、彼には何ものこりません。月がどの惑星にも向かないので、プトレマイオスによれば、彼は一人の婦人しか所有しないでしょう。彼が実際に一度しか結婚しなかったことは不思議なことであります。これ以上のことを言う必要がありましようか。彼が私のところにいれば、私は彼にもっと伝えるでしょうが。だがこれで十分です。私のことを彼にくれぐれもよろしくお伝え下さい。…プトレマイオスの意見によれば、*Centiloquium* 49（意味不明）においてデューラーは君を支配するでしょう。なぜなら、使用人の昇る宮は主人の昇る宮のうちの第十番目であるときに、使用人は主人を支配するであろうと、彼は言うからです。（この部分のゲオルギウス・トラペテュンティウス *Georgius Trapezuntius* による訳は次のようである。：被保護者の昇る宮が主人の中央の天にあるとき、主人は、被保護者によって彼が命令されているというように、被保護者のことをとります。）もっと書こうと思えば書けますが、時間がありません。お達者で。」

#### 6. Christoph Scheurl (1481-1542) :

Aus Christoph Scheurls lateinischem “Buchlein über die Verdienste Deutschlands” (1508)

Christoph Scheurl, *Libellus de laudibus Germaniae et ducum Saxoniae* (Leipzig 1508),

fol.h 5.(43<sup>ab</sup>) (“Rede zum Lobe Deutschlands”),  
*Dürer und die Nachwelt* S.19ff. R.1.290f.

著者クリストフ・シヨイルル *Christoph Scheurl* (1481-1542) は、ニュルンベルク生まれのドイツの人文主義者でデューラーの友人。訳出された文は彼の著者『ゲルマニアとザクセン公国を称える小冊子』の一節。

「ニュルンベルクのアルブレヒト・デューラーについて私は何を言うべきであろうか。万人の一致する意見によれば、彼は現代における絵画と彫塑の最高級の美術家である。彼はほんの最近イタリアを再訪したとき、ヴェネツィアとボローニャの美術家たちから第二のアペレス (*alter Apelles*) として歓迎された。その時、私は何度も通訳をつとめた。

〔博物誌〕第35巻第10章におけるプリニウスの証言によれば、昔ゼウクシスは彼が描いた葡萄で鳥を騙し、またパラシオスは彼が描いたカーテンでゼウクシスを騙したというが、我がアルブレヒトも犬を騙した。即ち、彼が鏡を用いて自画像を描いて、描きたての絵を日に曝していたとき、周知のように彼の子犬がその絵に走り寄ってきて、主人に出会ったと思って、その絵に愛撫の唇をつけた。（なぜならまたもプリニウスの証言によれば、たとえ主人たちが突然現れたとしても、犬だけがその名前を知り、主人たることを見分けるからである。）私は証言できるが、今日もその痕が認められる。それに女中たちは何回、彼が丁寧に描いた蜘蛛の巣を取り払おうとしたことか！彼の神的な才能を示す証拠がまだ多く他に（*divini ingenii multa alia monumenta*）。ヴェネツィア居住のドイツ人たちは、その街全体の中で最も完全な絵が彼によって創られたこと、彼がその作品で皇帝を極めて正確に描き、息吹以外に欠けているものがないように見えることを指摘する。

彼の三つの絵がウィッテンベルクの万聖人教会を祭壇の近くで飾っている。この三つの絵画で彼はアペレスと競うことができると信じた。<sup>(2)</sup>

これら昔の画家に—全ての教養人同様に—明るい本性が内在していたように、我らがアルブレヒトもきさくで、親切で、感じがよく、極めて誠実である。そして特に彼はまるで兄弟のようにヴィリバルト・ピルクハイマーに非常に愛された。この人はギリシア語とラテン語に精通し、卓越した演説家、市参事会員、軍司令官である。

今年詩人スブルリウス Sbrulius がフェラーラ〔実際はヴェネツィア〕で、何世紀も中断していたがニュルンベルクの画家によって再生させられた特別な絵画術 (pingendi artem) に驚嘆したとき、次のような四行詩を即興で創った。

かつて古人は画家アペレスに感嘆したが、  
いまや世界はデューラーが我々に示したのを見て驚嘆するであろう。  
彼は子供も大人も老人も描いたが、  
魂のない作品とみられるようなものは殆どない。

スブルリウスによるアルブレヒト・デューラーへの即興の二行詩

その絵でデューラーはギリシアのアペレスを凌駕した、  
彼はまことに天国に行くのに相応しい。

第一級の高名な画家アルブレヒト・デューラーへの同じスブルリウスの警句

汝は汝の絵で私に世間的名誉をもたらしたが、  
私による称賛の詩は汝に永続的名声を与えるであろう。  
汝の手による作品により私は未永く生きるが、  
私の筆も永遠の生命を汝に保証するであろう。  
私の筆のおかげでデューラーはいつかはオリンポスに列せられようが、  
彼の指の巧みさのおかげでスブルリウスは幾世紀も称えられよう。」

注(2)：三つの絵とは、所謂「ドレスデン祭壇画」(1497年、ドレスデン国立絵画館)、「三王礼拝」(1504年、

フィレンツェ、ウフィツィ美術館)、「一万人の殉教」(ウィーン、美術史美術館、1508年)を指す。

7. Aus Scheurl's lateinischer Biographie des Probstes Anton Kreß (1515)

*Dürer und die Nachwelt* S.21ff. R.1.294f.

訳出された文はクリストフ・ショイルル著『アントン・クレス伝』(Anton Kreß 1478–1513)の一節。アントン・クレスはニュルンベルク市聖ローレンツ教会司祭。

「彼〔アントン・クレス〕は現代の美術家たちが気に入っており、とりわけニュルンベルクのデューラーを非常に高く評価した。私はデューラーのことをドイツのアペレス (Germanum Apellem, ainen teutschen Apellem) と特別に呼ぶことにしている。他の人はともかくとして、ポローニヤの画家たちがその証人になってくれる。私はその場にたちあったのだが、彼らはデューラーの前で、彼が世界における絵画の第一者たることを公然と認め、彼らがこのように会いたいと思っていたアルブレヒトに会ったからには、いつ死んでも構わないとさえ言ったのだった。彼の偉大さの更なる証拠は、現代ではアペレスに次ぐ唯一の人として、彼が絵画の理論 (de ratione pingendi, von der kunst vnd vrsach der malerey) について著した書物である。それについての評価は画家と後世の人に任せよう。私の心から愛するデューラーの高貴な誠実さ、弁舌の才、やさしさ、社交性、人間性ほど私の気に入るものはない。私はこれだけはどうしても言っておかなければならない。私がかつて敬語をつけずにその名を呼んだことのないヤーコプ・ヴィンプフェーリンクは、その『ドイツ史略』(1505年、シュトラスブルク)の第68章で、我々のアルブレヒトがコルマルのマルティン・シェーン (Martino Schöen, Schon Merten von Colmar) [Martin Schongauer] を師にもつたと伝える。だが私がそのことに触れた際、アルブレヒトが書簡でもそしてしばしば口頭でも私に確認したことによれば、次のようである。即ち、ハンガリーのウォラディウム (ヴァルダイン) 市近在のクラ (ジュウラ) 村出身の父アルブレヒトは、

13歳の少年の彼をその卓越した名声の故にマルティン・シェーンの許に弟子入りさせようと決心して、この目的のために紹介状をもたせた。しかしこの間この人が逝ってしまったので、彼は我々の隣人で同郷人たるミヒャエル・ヴォールゲムートの工房で三年間の修業を終えた。ドイツ国遍歴の途上、彼は1492年についてコルマールに来てマルティンの兄弟、金細工師カスパー、パウル、画家ルードウィッヒ、バーゼルでは金細工師ゲオルクに歓迎され丁重にもてなされた。だが彼はマルティンの弟子であったことはなく、一度も彼に会ったこともなかった。彼に会いたいという願いは勿論非常に強かったと。別の箇所でも私はアルブレヒトについて詳しく述べようと思う。」

8. Christoph Scheurl : Aus einer genealogischen Handschrift (1542)

*Dürer und die Nachwelt* S.23. R.1.297f.

訳出された文はクリストフ・ショイルルの「系譜学」に関する手稿の一節。

「ドイツのアペレス、当代きっての画家、アルブレヒト・デューラーが、彼〔クリストフ・ショイルルの甥アルブレヒト〕の洗礼に代父として立ち会った。このデューラー、彼の代父は、1528年4月6日に亡くなり、聖ヨハネ墓地に丁重に埋葬されたが、デスマスクをとるために美術家たちによって掘り起こされた。敬虔なハンス・フライの娘たる寡婦アグネスは、去る1539年12月28日日曜日昼の4時頃に他人の家主のもとで亡くなり、安らかに埋葬された。」

カンペはある古い手稿から次の文を印刷した。

(Eine andere Version aus "einer alten Handschrift" druckt Campe S.173.

Friedrich Campe: Reliquien von Albrecht Dürer, seinen Verehrern geweiht (Nürnberg)

「上述のように、アルブレヒト・デューラーは1528年の聖週間の4月6日にニュルンベルクで享年57歳で安らかに亡くなり、聖ヨハネ墓地に丁重に葬られ、翌日幾人かの美術家によって墓があ

けられ、デスマスクがとられた。」

9. Johann Cochläus (1479–1552) : In seinem Anhang zur Kosmographie des Pomponius Mela (Nürnberg 1512), *Dürer und die Nachwelt* S.23. R.1.293.

著者ヨーハン・コッホレウス Johann Cochläus (1479–1552) はドイツの人文主義者、神学者、ルターの反対者。訳出された文は「ポンポニウス・メラの宇宙論補遺」の一節。

「この美術家の天才 (artificum ingenia) は単にドイツ人だけでなく、イタリア人、フランス人、更には遠くスペイン人までも驚嘆させ、彼らに最大の関心を抱かせた。遠くまで送られる作品そのものがそれを証明する。(最近アルブレヒト・デューラーが創作し、銅板に彫り、自ら刷った) 受難の描写〔連作銅版画受難伝 M.3ff.〕がある。それらは非常に繊細で真の透視図法 (perspectiva) で描かれているので、ヨーロッパ中の商人が彼らの国の画家たちの手本としてそれらを買っている。」

10. Johann Cochläus : Aus einem lateinischen Brief vom 5. April 1520 aus Frankfurt am Main an Willibald Pirckheimer, *Dürer und die Nachwelt* S.24. R.1.265.

訳出された文はヨーハン・コッホレウスからヴァイバルト・ピルクハイマーに宛てられた1520年の手紙である。

「どうかアルブレヒト・デューラー殿によろしくお伝え下さい。昨日市長 (Philipp Fürstenberger, Bürgermeister in Frankfurt) は私の家で彼のヒエロニムス (M.59) とメランコリー (M.75) を見ました。そして我々は彼について長い会話をしました。だが、このメッセで彼の作品が非常に稀であるのに対して、ホルントのルーカス (Lukas van Leyden) の絵 (picturae、銅版画が意味されている) が非常に多くみられたことを、私は不思議に思います。」

11. Ulrich von Hutten (1488-1523) : Aus einem lateinischen Brief an Willibald

Pirckheimer vom 25. Dezember 1518

[Augsburg], *Dürer und die Nachwelt* S.25.R.1.262.

著者のウルリッヒ・フォン・フッテンUlrich von Hutten (1488–1523) はドイツの人文主義者、宗教改革の支持者でルターの庇護者、桂冠詩人。訳出された文はヴィリバルト・ピルクハイマー宛の1518年の手紙。

「ドイツの他の全ての都市は盲目であるが、ニュルンベルクだけは片目だけでも見ているというあのヴェネツィアの諺の根拠は、精神の鋭敏さと全く特別な活動性の点で貴方たちが傑出していることにあり、と私は思います。それは手で作られた芸術作品にも認められます。なぜなら貴方たちのもとの作られた作品は本当に立派で、他の都市の作品よりも人々の望みに適しているという確信を、すでに全ての人たちは抱えています。貴方たちの作品には駄目なところがないとも言われています。イタリアでは現代のアペレスたるアルブレヒト・デューラー (Albertus Dürer) がその作品によってこの確信を最もよく喚起します。あの国民に病的な嫉妬心からか、あるいは、精神性を重んじる全ての人にとって我々〔ドイツ人〕は鈍く不適合であるとする古来の意見からか、そのいずれかの理由で容易にはドイツ人を褒めないイタリア人たちが、彼には感嘆し、自分から彼に負けたと言うだけでなく、彼らのなかの何人かは、作品を売りやすくするために、それらを彼の名前で売りさばくほどであります。」

12. Caspar Ursinus Velius (1493–1539) :

Aus seinem lateinischen Gedichten,

“Poematum libri quinque” (Basel 1522).

*Dürer und die Nachwelt* S.25. R.1.295f.

Koerner p.201.

著者カスパー・ウルシヌス・ヴェリウス Caspar Ursinus Velius (1493–1539) は皇帝フェルナンド一世の宮廷史料編纂者、皇帝マクシミリアン二世の教育者。訳出された文は彼によるラテン詩の一節。

デューラーの作品「アダムとイヴ」について：

「天使が彼らを見たとき、彼は驚いて言った。

私が汝たちを天国から追放したとき、汝たちはこのように美しくはなかった。」<sup>(3)</sup>

デューラー作「ヴェリウスの肖像画」について：

「声が増えれば、それは確かに前だ：

お前を生み出したのは画家か父親か、

ウルシヌスよ、見分けがつかなくなる。」<sup>(4)</sup>

注(3)：カーナーによれば、上記の詩に詠われたデューラーの作品が、1504年の銅版画、マドリードの油彩画、連作木版画「受難伝」(の「墮落」と「天国追放」)のいずれの作品を指すかは、まだ議論の余地がある。Koerner, p.485f.

注(4)：この肖像画は現在失われている。

13. Erasmus von Rotterdam (1466-1536) :

Aus einem lateinischen Brief an Willibald

Pirckheimer vom 19. Juli 1523 [Basel]

*Dürer und die Nachwelt* S.26. R.1.268.

著者ロッテルダムのエラスムス Erasmus von Rotterdam (1466–1536) はルネサンス期最大といわれるオランダの人文主義者。『痴愚神礼賛』の著者。ここに訳出された四つの文はそれぞれヴィリバルト・ピルクハイマー宛の四通の手紙 (1523年、1525年、1526年、1528年) の一節。

「私は心から我々のデューラーに祝辞を述べます。彼は不滅に値する美術家 (artifex) です。ブリュッセルで彼は私を描き始めていました。彼はもう描き終わっているでしょう！我々は彼と同じ状態にあり、降ってわいたような災いにとりつかれてしまいました。私はいまではこの嵐のような時代から抜け出てキリスト (ad Christum) に至るであろうという、ある種の楽しみを心に感じています。」

14. Erasmus von Rotterdam :

Aus einem lateinischen Brief an Willibald

Pirckheimer vom 8. Januar 1525 [Basel]

*Dürer und die Nachwelt* S.26. R.1.271.

「私は〔私の肖像を〕デューラーに描いてもらうことを希望致しました。これ程の美術家に描いて

もらっても、別にそれはいいでしょう。でもどうすればそれは可能なのでしょうか。彼はブリュッセルで私を木炭で描き始めました。しかしいまの私は〔その時に較べると〕ずっと前からやせ衰えてしまっていると思っています。私の鑄造された像〔クエンティン・マセイスによる1519年のメダル〕に基づきかつ彼の記憶から何かをなすことができるのであれば、彼が貴方になしたこと〔ピルクハイマーの銅版肖像画、M.103〕、つまり脂肪がつくようにしたことを私にも〔きっと〕します。]

15. Erasmus von Rotterdam :

Aus einem lateinischen Brief an Willibald Pirckheimer vom 30. Juli 1526 [Basel]

*Dürer und die Nachwelt* S.26f. R.1.276.

「どうしたらアルブレヒト・デューラー (Alberto Durero) にお礼を述べたらよいか、考えています。彼は永遠に記憶されるのに相応しい人物です (Dignus est aeterna memoria)。たとえその図 (銅版肖像画、M.105) が必ずしも私に似ていなくとも、それは不思議がるにはあたりません。いまの私は五年前の私ではありませんので。」

16. Erasmus von Rotterdam :

Aus einem lateinischen Brief an Willibald Pirckheimer vom 31. März 1528 [Basel]

*Dürer und die Nachwelt* S.27. R.1.279.

「〔デューラー重病の知らせをうけて〕私はデューラーの運命をいたく嘆きます。私が彼について書いた箇所を貴方は読まれました〔エラスムスの著書『ラテン語・ギリシア語説教の正しい発音について』におけるデューラー論を指す〕。〔彼の〕全ての仕事がいまや終わりました。それはどうしようもないことだと、貴方はもしかすると言われるかもしれません。私もそれを認めます。それにしてももう二度と機会はないのです。そして拙著などは、それがいまはどうであれ、人間の手で飛んでいってしまうと思うのです。」

17. Erasmus von Rotterdam :

Aus dem lateinischen “Zweigespräch

vom richtigen Vortrag der lateinischen und griechischen Rede” (Basel, 1528)

(原題: “Dialogus de recta Latini Graecique sermonis pronunciatione”)

*Dürer und die Nachwelt* S.27ff. R.1.296f.

訳出された文はエラスムス著『ラテン語・ギリシア語説教の正しい発音について』の一節である。

「獅子: 私は書くことでは幾分か教育をうけていると思います。

熊: もう一つ付け加えたいことがあります。若者たちがそれを苦勞せずに容易になせるように、教育されなければなりません。幾人かの人は非常に教え方が厳しいので、若者たちはその知識を学ぶことを評価するよりも憎みさえします。更に若者たちは時々いやというほど絵画の修業をさせられます。自己の認識に表現を与えること、また他の人のなしたことを認識すること、このようなことに喜びを覚えるや、すぐにでも己自身の衝動からこの絵画術で上達する人も幾人かいます。音楽に通じている人が、たとえ歌わなくとも、〔そうでない人より〕一層適切に朗読するように、あらゆる形を線で呼び出すことのできる人は指を訓練して文字をよりしなやかに巧みに描きます。それについて一層基本的で正確なことを求めるとすれば、アルブレヒト・デューラーの書いた本 (liber Alberti Dureri) があります。それはドイツ語で書かれていますが、多くの知識に溢れています。その本で彼はこの絵画術の古代の先駆者、特に全ての学問、幾何学と算術の学問に精通していたマケドニアのパンプイルス (Pamphilus) に倣っています。なぜなら彼は、これらの〔数学的〕専門分野を修めずには絵画術を完全なものにすることはできないと主張するからです。更に彼は、その弟子ペルセウス (Perseus) のために絵画術について書き、数学的原則から得られた素描の秘密について多くのよきことを伝えたアペレス (Apelles) を引き合いに出しています。そしてこの書には基本となる図形並びに文字の形と寸法に関する記述が少なからずみられます。

獅子: デューラーの名前を私はずっと前から知っ

ていました。彼は絵画の親方のなかでも最高の名声を享受しています。ある人たちは彼を現代のアペレスと呼んでいます (Quidam apellant horum temporum Apellem)。

熊：アペレスがいま生きていたら、彼はデューラー同様高貴で純粋であったので、我らがデューラーに彼の栄光の棕櫚〔の葉の冠〕を譲ったと、私は実際に思います。

獅子：どうしてそのようなことが信じられるのでしょうか。

熊：アペレスがある絵で描き止めようとしなかったことを除けば、他の美術家たちから批判を被らなかつた絵画術の第一人者であることを、私は認めます。素晴らしい非難です！しかし、たしかに色数も少ないし派手な色ではなかったが、ともかくもアペレスには色彩が役だったのです。デューラーは他の関連でも感嘆されますが、彼はとりわけ全てのものを単色で、即ち黒い線で (in monochromatis, hoc est nigris lineis) 表現しなかつたのでしょうか。影、光、輝き、突出物、凹んだもの。それらの表現では、鑑賞者の眼前に事物の状態のある表象が現れるだけではありません。彼はそれらの均整と調和を正確に観察したのです (Observat exacte symmetrias et harmonias)。否むしろ彼は一切を、描かれ得ないものまでも描いたのです。火、光線、雷鳴、電光、雷電あるいは壁上の雲、いかなれば、感覚、あらゆる感情、要するに身体の形状に現れる人間のあらゆる精神状態までも、更には人の声さえも彼は描いたのです。〔プリニウス35,96：アペレスは雷鳴、電光、雷電など絵では表せない事物をも描いた。〕彼はこれらをそれらに最も相応しい線で、しかも黒い線で (lineis nigris) 眼前に示したので、もし貴方が作品に色を塗るならば、作品が損なわれるほどです。アペレスが色彩のお陰で優れているとすれば、〔デューラーのように〕色彩を用いずに優れている方が、もっと素晴らしいと言えないのでしょうか。

獅子：今日では大家を殆ど生み出さない絵画術に、これほど高い学識が存していたとは私は思いもせませんでした (Non arbitrabilis esse tantum eruditionis in arte pingendi, quae nunc vix alit artificem)。

熊：傑出した美術家たち (insignes artifices) が質素であるということは、今に限ったことではありません。それにしても線描術 (graphice) はかつては自由学芸 (artes liberales) に数えられ、重要で名声のある美術家たちだけが、それを学ぶことができたのです。奴隸的模倣に終始することがないように、そうでない人には学ぶことが禁じられたのですから。線描術に報酬が与えられないとすれば、それは君侯の恥であって、線描術の恥ではないのです。

#### 18. Willibald Pirckheimer (1470-1530):

Aus einem Brief an den Wiener Baumeister  
Johann Tschertte (†1552)

(November 1530 Nürnberg)

*Dürer und die Nachwelt* S.31-35.

R.1.283-288. 前川p.38f.

著者ヴィリバルト・ピルクハイマー Willibald Pirckheimer (1470-1530) はドイツの人文主義者、デューラーの親友。訳出された文はウィーンの宮廷で活動した築城技師チェルツェ宛の1530年の手紙の一節。チェルツェはある時期デューラーの居住地ニュルンベルクに滞在したことがある。

「私の愛するチェルツェ様に私の心からのご奉仕を申し述べます。私たちの良き友ヨルク・ハルトマン (Jorg Hartman, Georg Hartmann 1489-1564, ニュルンベルクの聖ゼーバルト教会の助任司祭) は彼宛ての貴方の手紙を私に見せてくれました。それによりますと、貴方は私のことを好意的に覚えておられたのみならず、私が自分に相応しいと思っている以上に賞賛と敬意を私に払って頂きました。しかしこのような好意は神に召された私たち二人の友アルブレヒト・デューラー (Albrecht Dürer) にこそ相応しいと思います。貴方が学識と徳 (kunst vnd dugent) の故に彼を愛しましたので、彼に好意をもった人たちも貴方に好意をもつことは疑いありません。このような人にこそ貴方の賞賛は相応しく、私には全く不相応なものと思います。私は寔にアルブレヒトにおいて私がこの世でもち得た最良の友の一人を喪いました。彼がこのように傷ましく亡くなっていった以上に私を嘆かせることはありません



ん。この死を私は神の定めによって彼の妻以外の誰にも帰すことができません。彼女は彼の心臓を蝕みかくも彼を苦しめたので、彼はそれだけ早くこの世を去ったのです。彼は薫しべのようにやせ衰え、もはや愉しみを求めたり人びとのもとを訪れることもゆるされませんでした。この性悪女はこのように彼を看病したのですが、それは彼女には実際何の必要もないことだったのです。更に彼女は昼も夜も彼に付きまとい、情容赦なく彼を仕事へと駆り立てましたが、それは彼がお金を稼いでそれを彼女に与えるためだけで、こうして彼は死んでしまったのです。なぜなら彼女はいまもそうですが、アルブレヒトが六千グルデンもの資産を彼女に遺したことなど考えずに、飢え死にすることをつねに懼れていましたので。それでも〔六千グルデンの資産でも〕彼女には満足のいくものではなかったのです。要するに彼女こそが彼の死の原因だったのです。私は屢々面と向かって彼女の疑り深く許されがたい性質を槍玉に挙げて注意し、とどのつまりどういうことになるかを予告したのですが、結果は恩知らずを知っただけでした。なぜなら彼に好意をよせ彼と懇意にしている人に、彼女は辛く当たったからです。そのことが本当にアルブレヒトを悲しませ、彼を死へと追いやったのです。私は彼が亡くなってから彼女に会っていません。彼女の方も私のところに来ようとはしません。多くのことで私は彼女を助けたのですが、ともかくも信頼されていないのです。彼女に反対し、あらゆる事柄で彼女の言うことを認めない人に、彼女もまたすぐに敵意を抱きます。それで彼女は私の傍にいるよりも私から離れている方を好むのです。彼女もその妹も勿論あばずれ女などではなく、敬虔で神を畏れる女性であることを私も疑っていません。しかし〔妻としてもつには〕その傍では日夜安らぎも憩いも得られない、こんな口やかましくがみがみ言う性悪の信心深い細君より、普段は愛想のいいあばずれ女のほうがよいのではないのでしょうか。ともかくも私たちは、敬虔なアルブレヒトに情け深く慈悲深くあられる神の命ずるがままになさなければなりません。なぜなら彼

は信仰篤い実直な人間として生きたのですから。彼はまた完全にキリスト教徒として、神の祝福を受けて死んでいきました。それで彼の救済について心配することはありません。私たちが定められた時に神の祝福を受けて彼の後を追えるよう、神よ、私たちに恩寵を与え給え。

私の愛するチェルッテ様、ハルトマン・フォン・リヒテンシュタイン殿 (Hartmann I. von Liechtenstein, †1540) から二本の鹿の枝角が私のところに贈られてきました。それは疑いなく貴方の斡旋で運ばれたものです。この種のものが私のところには余りにも少ないことを、貴方がお気にかけて下さったからです。ハルトマン殿ご自身が拙宅におられた時に、殿は小生の所有する枝角をご覧になって、それらよりはるかに美しく大きい枝角を私に送ろうと申し出られました。もっていなかった訳ではないのです。枝角を二、三もってはいたのですが、ここで知るような〔=いま送ってもらった枝角のような〕美しく大きなものをもちたいと私はかねて思っていました。縁どって上の階に掛けさせようと思っていました。... アルブレヒトも幾つかの鹿の枝角をもっていました、そのなかには私ももちたいと思うような見事なものもありました。しかし彼女〔アグネス・デューラー〕はひそかにそれらの角を他の多くの貴重な品々とともに、はした金で売り払ってしまいました。今までヴィーンにいたある下男が私に言うには、そこで幾つかの見事なものを見たということです。一つか二つの素敵なるものを手に入れることができるならば、金に糸目はつけないのですが。...

トルコ人の恐ろしい侵入については、多くのことを書く必要はありません。なぜなら私たちの君侯と殿方たちは一致協力しようとはせず、彼らを抵抗へと目覚めさせることは実際全く厄介なことですから。... 私たち新教の傭った歩兵 (vnserevangelisch lantzknacht) がどのようにしたかが明るみにでましたが〔戦線離脱と逃亡〕、それもルター言葉と行い (der Lutherischen wort und werk) が如何にかけ離れているかが感じられるという意味で、もしかするとよいことなのかもしれません。なぜ

なら貴方の傍や周囲にいる多くの敬虔で尊敬すべき人たちが、〔新教の〕信仰と聖なる福音書について (von dem glauben vnd dem heyligen Ewangelio) このように甘美に語られるのを聞くならば、それ〔新教〕は輝く純金で真鍮ではないと思うことは疑いがないからです。私も最初私たちの故アルブレヒトと同様によきルター派の信者 (gut lutherisch) であったことを、私は告白します。なぜなら私たちは、ローマの悪事、僧侶と坊主どもの愚行が改められることを願ったからです。だがよく見れば、事態はもっと悪くなっていて、福音派の悪者ども (die ewangelischen puben) があの〔ローマの〕悪者どもを敬虔に見えさせているのです。．．．」

19. Helius Eobanus Hessus, Koch (1488–1540) und Thomas Venatorius (ca.1488–1551):

Aus dem lateinischen “Trauergedicht auf den Tod des höchst vollkommenen Malers Albrecht Dürer zu Nürnberg”

(1528), *Dürer und die Nachwelt* S.35-41. R.1.298-303.

著者ヘリウス・エオバナス・ヘッスス Helius Eobanus Hessus, Koch (1488–1540) はドイツの人文主義者、詩人。トーマス・ヴェナトリウス Thomas Venatorius (ca.1488–1551) はドイツの人文主義者、数学者、神学者。訳出された文はヘリウス・エオバナス・ヘッススによるデューラーへの追悼詩の一節。

「ヨーアヒム・カメラリウスよ、晴朗で高雅な詩作をものし、リラを手にとり、美しい調べで嘆きの詩を詠えかし。

友として、汝が友を嘆くその短き間に、

我らも死者へのふさわしき供物を捧げよう。

デューラーは故人となり、天の楽園へと帰って行った。

天のみがこのような人物を我々に送られた。

いまこそ悲嘆のムーサたちが汝のために悲しみの歌を唄い、

アポロも悲しみにくれて汝のために哀歌を詩作

するであろう。

なぜなら、彼の生涯の地上の輝きに等しきものはなく、

芸術と天才において、彼より偉大なものは誰もいないから。

この画家は我々の世紀の飾りであり、

彼と名声を等しくすることを、誰も望むことはできない。

ああ！彼は逝ってしまった。だが、運命はけしからぬと、誰が文句を言えようか。

デューラーは美術においてアペレスより偉大であった。

．．．．．  
色彩が成し遂げ、人が色彩について教える全てのことを完全に支配した手が、

いまや醜い色に染まって横たわる。

その指はいまは色褪せてしまったが、かつては薔薇色をしており、

もし人が望めば、象牙にうまくつながりそうであった。

おお！アルブレヒトよ、かつて汝が描いた作品に匹敵する仕事を、誰が為し得ようか。

誰が汝の後継者に値する者になるであろうか。

汝が逝ってしまったので、自然さえ悲しんでいようようにみえる。

汝が学識豊かな手で殆どよみがえらせたとも言える自然が。

それだけにあらず、未完成のままに遺されし作品も、汝の死を嘆く。

死神が汝を突然襲った故に、それらは死んだように横たわる。

おお！語れかし、汝の創りし入魂の形態よ、悲しみの像よ、

おお！語れかし、お前らを創りし人はいま何処と。

汝がかつて願望しながら絵画のなかに入れたものも嘆く。

そしてこの美術家が自分たちから去ってしまったことを美術も嘆く。

それだけにあらず、モデルに従って描かれた像

すら、  
 汝が生きていた時には、微笑んだ。  
 [いまは] その乾いた眼から涙が落ちる。  
 -----  
 彼は卓抜な技術により完全な美に達しただけではない。  
 彼はまた素晴らしい実践的な精神のもちぬしであった。  
 学問と称されるものの全てを彼は正確に知っていた。  
 かのシチリアの老人 [アルキメデス] も彼ほどには知らなかった。  
 彼は防塁で囲まれた堅固な都市 [の作り方] を教えた。  
 そして彼は相応しい場所に陣営を築いた。  
 彼は非常に精巧で効果のある戦争の道具を製作することができたので、  
 彼は敵の軍隊を城壁から追い払った。  
 それだけにあらず、彼は歩兵の傘形隊形の先鋒、騎馬隊の密集方陣さえ配置した。  
 小・中・大隊、翼、傭兵部隊、精鋭部隊を。  
 彼は単にそれを描いただけではなく、  
 彼はその作り方も示した。  
 彼がそれに成功したことは、国家の文書と印章が証明する。  
 -----  
 汝の如き人物の再来の希望はないのだろうか。  
 ピュタゴラスのような人が教えた再生は、どこにあるのだろうか。  
 それ故今日美術の王国に一何千といえる一名声を有する人たちは、汝の逝去を悼む。  
 彼らが有名であることを汝の美術に負う全ての人たちも、悲しむであろう。  
 彼らは偏に名声を汝に負う。  
 それだけにあらず、祖国も、かの有名な祖国も汝を悼み、  
 悲しみに打ちひしがれ、頭をたれて、座りながら灰を撒く。  
 ハルツ山は汝を悼み、ニュルンベルク市も汝のことを嘆く。

それだけにあらず、大理石のように明るく光る湖も涙を流す。  
 若者たちは汝に涙し、老人たちは汝のことを泣き悲しみ、  
 汝が汝の美術で品位と尊厳を与えた市も嘆く。  
 ペグニッツ河の水も涙を流し、  
 陸地、小川、河川、湖の全てのもの以上に悲しむ。  
 -----  
 役所の手が絵画に汝の面影を保つであろう、汝の功績に対する感謝をこめて。  
 誰かがいつの日かそれを見るとき、それは語るであろう：汝の名声は生きており、永続すると。<sup>(5)</sup>  
 それだけにあらず、彼は生きるであろう。  
 彼は決して死神の犠牲にはならないであろう。  
 彼の死体は母の膝にのみ戻る。  
 なぜなら汝のより良い部分とともに、  
 最も有名な画家たる汝は、更に生き続ける。  
 汝は墓のなかでは、より悪い部分とともにのみ横たわる。  
 善きものがあとに残るとき、私たちは神に祝福されて死ぬ。  
 なぜなら生命のうちこれこそが、まことにより良いものであるから。  
 たとえ誰であれ、その才能の記念碑が遺され、後世の人たちがそれを褒め賞賛するならば、誰も死ぬことにはならない。  
 汝は多くの、否、何千という作品を私たちに遺してくれたので、  
 この世で生涯を終えたのは、汝の肉体だけだ。  
 汝の生命も、身体的な生命も私たちに魅了したので、  
 私たちがそれをもっと長くできないことが、嘆かわしい。  
 そして私たちは墓の前に、まだ殆ど閉ざされていない墓の前に立ち、  
 慣わし通りに、私たちは死者を崇める。  
 ご機嫌よう、ご機嫌よう、今日の画家たちの飾りよ！  
 汝の霊が天国へと高く飛んでいきますように。

ああ、私たちがなした以上に、  
 汝への賞賛を私たちがより良く謳うことができ  
 ないことは、  
 私たちにとって何と悲しいことか。さらばご機  
 嫌よう！  
 人がデューラーを賞賛するときに、彼らが気を  
 悪くしないように、画家たちに〔述べる〕。  
 今日アペレスの芸術において名声が保たれる  
 汝、実直な群、全ての画家の聖なる群よ、  
 詩がどう書かれていようと、汝らが詩を嫌いに  
 ならないように、私は汝らに懇願する。  
 それらが極めて激しくデューラーに拍手喝采し  
 ているとしても。  
 それらが彼を賞賛するとしても、  
 それらは決して汝らの名声にけちをつけよう  
 というものではない。  
 汝ら自身も賞賛する彼に、それらは賛辞を呈す  
 る。  
 汝らのなかでも、最高の賞賛に値し、それに与  
 る者は誰であるか、  
 それについては、今日私たちには完全に明らか  
 に知られている。  
 死神は功績をあらゆる嫉妬心より上にかかげる  
 ので、  
 猜疑心だけを煽るようなものは何もない。  
 人が生者には羞恥心から言わないことでも、  
 その死後には、口はそうでないときより一層開  
 いて語る。  
 たとえここで捏造とまではいかないにしても、  
 多少の色付けをすることは、  
 多くの心を傷つける、それがよしんばよじ曲が  
 った心としても。  
 礼儀を弁えている人に、私は改まってお願いす  
 る。  
 実際に意図されているように、彼が拙作をうけ  
 とられるようにと。  
 しかし汝らのなかの一人でもこの点で叱責する  
 者がいれば、  
 それはとんでもないことだから、  
 私はその程度に応じて、その人を誹謗するであ

ろう。  
 というのも、人が主張するように、詩作が彩画  
 に似ていなくもないならば、  
 詩作は彩画の同伴者であるのも至極当然とすべ  
 きであるから。

#### アルブレヒト・デューラーの碑銘

アルブレヒト・デューラーが隠されている墓に  
 は、彩画がなすことのできる一切が同時に埋葬  
 されている。(R.1.302, g. Aliud.)

#### 別の碑銘

才能と技術が称えられることを、いかに運命が  
 禁じようとも、  
 デューラーのような人物〔のそれ〕は、決して滅  
 びることがないであろう。  
 それ故彼は完全に墓のなかに横たわるわけでは  
 なく、  
 彼は生き、その天才の名声を星まで高く担うの  
 である。(R.1.301, e. Aliud.)

#### 別の碑銘

ああ！何故に汝はかくも急いで通り過ぎていく  
 のか。  
 おお！旅人よ留まりて〔次の碑銘を〕読め：  
 この墓に聖なるアルブレヒト・デューラーの遺  
 体が眠る。  
 寔に、ある画家の死を見ることは意味のあるこ  
 とである。  
 彼とともにその美術の名誉と名声も同時に滅び  
 る。(R.1.301, d.)<sup>(6)</sup>

注(5)：「1500年の自画像」(ミュンヘン、アルテ・ピ  
 ナコテーク)を指すと考えられる。

注(6)：d,e,f,gの碑銘はカメラリウスによる人体均衡論  
 の第三書と第四書のラテン語訳に採録された。fは  
 ここでは未訳。

20. Martin Luther (1483-1546) :  
 Lateinischer Brief an Helius Eobanus  
 Hesus, als dieser sein Trauergedicht auf

Dürer gesandt hatte (1528)

*Dürer und die Nachwelt* S.41f. R.1.281, 320.

著者マルティン・ルター Martin Luther (1483-1546) はドイツの有名な宗教改革者。訳出された文はヘリウス・エオバヌス・ヘッススからデューラー追悼詩を贈られたお礼の手紙の一節。

「キリストにおいて恩寵と平安を。私はすでに前にデューラーへの哀悼の詩とともに別の手紙を貴兄から受け取りました。そして貴兄は最初の手紙に対して私が返書する前に今回の手紙を出されました。私としては返書を遅らせる積もりはありませんでした。なぜなら私は自由にできる最初の使者ですぐにも返書を出そうと思っていましたので。勿論、卓越した人物であるデューラーを嘆くことは、信心深い者の義務です。しかし貴兄は祝辞を述べるべきだったのです。なぜならキリストは彼に神に祝福された終わりをお与えになり、この騒擾の、もしかするともっと後には一層騒擾となる時代から彼を連れ去られたのですから。それは、彼が最上のものを見て、最悪のものをみるように強制されないためなのです。彼が安らかにその父とともに眠らんことを。」

マルティン・ルター「卓上語録」(Tischreden) から：

「単純な説教師が最善である。ルター博士はかつて、ニュルンベルクの有名な画家アルブレヒト・デューラーが多彩な絵でなく極めて単純でまことに簡素な絵の方がよいと常々述べていた、と語った。同様に彼もまたまことに単純になされる説教がよいと、彼は語った。なぜなら、説教される内容がよく理解されるからである。」

21. Philipp Melanchthon (1497-1560)：

Aus einem lateinischen Brief an Joachim Camerarius ([Wittenberg, nach 7.] Mai 1528)

*Dürer und die Nachwelt* S.42-46. R.1.281, 288,306,288f.,289,306,325,327,328,327.

著者フィリップ・メランヒトン Philipp Melanchthon (1497-1560) はドイツの宗教改革者で、ルターの支持者。訳出された二つの文はそ

れぞれヨアヒム・カメラリウス (ドイツの言語学者、神学者) 宛の二通の手紙の一節。

「デューラー死亡の噂はニュルンベルクからよりもフランクフルトから此方〔ウィッテンベルク〕の方により早く届きました。しかし私は、よくあるように、このような重大な出来事をそう簡単に信じる気になれませんでした。ドイツがこのような偉大な人物である美術家を喪ったことは、私を悲しくさせます。」

カメラリウス宛メランヒトン書簡：Aus einem lateinischen Brief an Joachim Camerarius vom 15. März 1533

「私はデューラーの本を受け取りました〔恐らく人体均衡論のラテン語訳の第一書と第二書〕。私は彼のドイツ語の著作を全てもっています。そしてたとえそれらが私の役にたたないにしても、偉大で卓越した人物の憶いでのためにそれらを喜んでもっておきます。」

メランヒトン著『修辞学基礎二書』から：

Aus den lateinischen “Zwei Büchern von den Anfangsgrunden der Redekunst” (1532)

(R.1.306 : Elementa rhetorices (Wittenberg 1531) : De tribus generibus dicendi.)

「デューラーは全てのものをまさしく荘重にしかも抑揚豊かに緊密な線の運びで描いた。ルーカス (Lukas Cranach d. A. gest.1553.) の絵は素朴で、たとえそれらが魅惑的にみえても、比較すればデューラーの作品との隔たりは大きい。マティアス (Matthias Grünewald. gest. 1528.) はいわばその中間にある。」

ファイト・ディートリッヒ宛メランヒトン書簡：

Aus einem lateinischen Brief an Veit Dietrich vom 1. Dezember 1536

「私は貴兄にゲオルクとクリストフォルスの絵 (εἰκόνας) を送ります。それらは簡略な作品で、仕上げられているというよりスケッチに留まっており、私の記憶によれば私たちのデ

ューラーの〔亡くなる〕前の時期に描かれたものです。それらが貴兄と他の友人たちの気に入ればと思っています。私がそれらを素描し、別の人が賦彩しました。そしてクリストフォルスの絵は、たとえ貧弱でも、デューラーが見たなら褒めてくれただろう、などと思っています。．．．ルターはドイツ語の韻文でゲオルク〔についての本〕を出版しようと思ひ、その準備も始めていましたが、そうこうするうちに他の事柄が割り込んできました。私が思いますには、今や彼は中断した仕事に戻れそうにありません。それらが美しい装幀で出版されたならば、それらは多くの教養ある若者たちに歓迎されると、私は思っています。」

カメラリウス宛メランヒトン書簡：

Aus einem lateinischen Brief an Joachim Camerarius vom 10. Juni 1538 [Wittenberg]

*Dürer und die Nachwelt* S.43f. R.1.288f.

「私はデューラーの絵画と同様に貴兄の著作を評価します。デューラーの絵は全て素晴らしくまた見事ではありますが、その後期の仕事は厳しさが薄らぎ、いわばより優しくなりました。貴兄は今は豊富、輝き、荘重な言葉を好まれますが、もっと後になると、貴兄の親密な手紙の表現がそうであるように、貴兄の言葉もいわば柔らかい弦楽器の演奏におけるようにより明るくなることでしょう。」

ゲオルク・フォン・アンハルト宛メランヒトン書簡：Aus einem lateinischen Brief an Georg von Anhalt vom 17. Dezembr 1546 [Wittenberg] Georg III. von Anhalt-Dessau (1507-1553)。ゲオルクはメルゼブルクの司教、ルターの支持者。

「画家アルブレヒト・デューラー、才能と力量において卓越せるこの人物がかつて次のように言ったことを、私は憶えています。自分は若い頃は生き生きとして多彩な色の絵画 (floridas et maxime varias picturas) を好み、また自分の絵に色彩の多様さ (varietatem) を見た作品の賛嘆者に、それで大きな喜びを与えました。後に老

年となって自分は自然を観察し始め、その本来の現象に注目しようと努めました。そうして、この単純さこそが美術の最高の装飾である (simplicitatem summum artis decus) ことを、自分は理解しました。自分はそれに全く到達できなかったので、以前のように自分の作品を良いと思わずに、自分の絵を見てはしばしばため息を洩らし、その欠点について考えました。このように彼は言ったのです。そんなに重要でない分野 (in arte non summa) のものを描く際でも、それに対するこの人物の取り組み方は非常に綿密であったので、それは私の胸を痛ませるほどで、神学の最も単純な学問的解釈における私たちの状態が同じ入念さで行われていないという不快感をしばしば喚起したほどである。なぜなら私も単純さを愛し、神の素晴らしい御心によって教会に約束された事柄について意義深く語ろうと努めていますので。

それでも私は満足している訳ではありません。」

『メランヒトン語録』から：

Aus einer Sammlung von Melanchthon-Aussprüchen, herausgegeben von Johann Manlius.

R.1.325.:Philipp Melanchthon über Dürer. Sammlung Melanchthonscher Dicta, angelegt von Apollo Speiser aus Sondershausen 1556 in Wittenberg.

「皇帝マクシミリアンは、彼の希望でデューラーの描いた彩色された絵を木炭で模写したが、その際彼は木炭を幾度も割った。デューラーはその後同じ絵を難なく描いた。するとマクシミリアンは自分のときのように、木炭が割れなかったかどうかをデューラーに尋ねた。デューラーは笑いながら答えた。「皇帝陛下、もし陛下が私同様に巧みに描くことができたならば、それは私には好ましいことではないでしょう」と。それはあたかも彼が次のように言おうとしているかのようなのである。私はそれに熟達し、それが私の職業である。陛下はより重大な任務をもた

れ、異なる使命をおもちです。それは丁度すでに周知の諺に、ある人には錫杖を、他の人にはリラを、と言うのと同じです。(R.1.325,327)

ニュルンベルクの画家で学識ある人物たるアルブレヒト・デューラーは、ルターの著作が他の神学者のそれと次の点で異なると述べた。ルターの著作の最初の数頁の三、四節を読めば、著作全体で何が期待できるかを知ることができる。そして特に弁説のあの明快さと秩序、それがルターの著作を賞賛する所以であると。しかし他の神学者のそれについて彼は、著者が語り論及しようとする内容を注意深く考える必要があると語った。(R.1.328)

アペレスがウエヌスを描いたとき、彼は特に美しい乙女を三十人選んで、彼女たちを正確に観察することを心がけた。非常に尊敬すべき人物でニュルンベルクの画家たるデューラーも同様にした。彼は非常に立派な乙女たちをモデルに使った。傑出した、またまことに尊敬すべき老人たる父の画家ルーカスはそのことに触れながら、婦人の居間で次のように冗談を言ったものである。昔、乙女たちは画家たちの前で衣を脱いだ。そして画家たちは手で触れて肢体の比例を発見したと。」(文中の「画家ルーカス」は有名なドイツの画家である父のルーカス・クラナッハLucas Cranach d.Ä. のこと。彼はメランヒトン同様ウィッテンベルクに住んでおり、両者はつねに交際していた)(R.1.327)

カスパー・ポイサー編『メランヒトン語録』：  
Aus Kaspar Peucers "Abhandlung über Philipp Melanchthons Meinung im Abendmahlsstreit"  
(Amberg 1596), *Dürer und die Nachwelt* S.46f.  
R.1.306. カスパー・ポイサー-Kaspar Peucer  
(1525-1602) はメランヒトンの娘婿、医者、メランヒトンの著作と手紙の収集家で編集者。  
(Bialostocki pp.33.)

「当時メランヒトンはこのピルクハイマーと非常にしばしば何時間も一緒にいて、教会と学校〔ニュルンベルクにおける新しいギムナージウム設立の件〕の問題についてニュルンベルクで彼と協議した。

彼らの正餐には画家アルブレヒト・デューラーも招かれるのが常であった。デューラーは非常に聡明な人物であった。メランヒトンは彼について、彼は絵画術で優れているけれども、それは彼の業績のなかで最小部分にとどまると述べるのが常であった。これらの機会に、最近論じられた事柄に関して、しばしばピルクハイマーとデューラーの間で議論が生じた。ピルクハイマーはデューラーと激しく対立するのが常であった。デューラーは極めて繊細な論者で、あたかも議論の訓練を十分にやってきたかのように、反対者の議論を否認した。それで、胆汁質の男でまた激しい痛風に罹りやすかったピルクハイマーは、顔を真っ赤にして怒り、繰り返し次のように声を荒げて言った。「君が言うものは、描くことができないんだ。」それに対してデューラーは答えた。「君が提唱していることは言葉でも述べることができないし、想像することもできないのだ。」メランヒトンがピルクハイマーとデューラーのあの論争についてしばしば語るのを聞いたことを、私たちはいまでも憶えている。彼はそれを述べながら、有名なピルクハイマーと議論しながら示された画家の天才と力に驚き入ったと、彼は語ったものである。また彼は、チュービンゲン大学の神学者レンペ博士 (Dr. Jacob Lempe 1460/70-1532、スコラ神学者で法学者) が如何に無邪気に、聴衆—そのなかに彼〔メランヒトン〕もいた—に、全質変化をチョークで壁の板に描いて見せることを常としていたことも回想した。」(R.1.306)

## 22. Beatus Rhenanus (1485-1547):

Aus seinen Anmerkungen zur Naturgeschichte des Plinius (1526, verfasst 1524) [Basel]

(R.1.296 : In C. Plinius [Emendationen zu des Plinius Naturalis Historia])

*Dürer und die Nachwelt* S.47. R.1.296.

著者ベアートゥス・レナーヌス Beatus Rhenanus (1485-1547) はドイツの言語学者で歴史家。訳出された文はプリニウス著『博物誌』の

『注解書』（バーゼル、1526年）の一節。

「古人〔古代ギリシア人とローマ人〕に傑出していた人が多くいたように、今日のドイツ人では第一にニュルンベルクのアルブレヒト・デューラー、シュトラスブルクのヨハネス・バルドゥンク、ザクセンのルーカス・クロナキウス（クラナッハ）、スイスのヨハネス・ホルバインがぬきんでている。ホルバインは確かにアウグスブルク生まれであるが、すでにずっと以前からバーゼルの市民となっており、去年私たちのエラスムスを二度も極めて巧みにしかも非常に優雅に描いたが、それらの絵は後にイギリスに送られた。<sup>(7)</sup> 私たち同国人がかつてのギリシア人やローマ人と同様に絵画について評価するならば、絵画が賞賛と利益を期待して熱心な修練を通して技術の完成に容易に到達することを、私は疑わない。なぜなら、名誉は諸藝を育む (honor alit artes) という格言は寔に真実であるから。」

注(7)：ハンス・ホルバイン（子）が描いたエラスムス像は現在三点あり、それぞれパリのルーヴル美術館、

イギリスのロングフォード・キャッスル、バーゼル美術館にある。

### 23. Johann Hess (1490-1547):

Aus einem lateinischen Brief an Willibald Pirckheimer vom 13. Juli 1529 [Breslau]

*Dürer und die Nachwelt* S.47. R.1.283.

著者ヨーハン・ヘス Johann Hess (1490-1547) は Breslau 司教の秘書、ルターやメランヒトンと親交があった。訳出された文は1529年のヴィリバルト・ピルクハイマー宛の手紙の一節。

「私の最も良き保護者たる貴兄にお願いします。貴兄の忠実なる家人をして私たちのそして永遠に私たちの友たるアルブレヒト・デューラーの本を集めさせて下さい。私の蔵書にそれらを収めるためです。それが私たちのデューラーの工房からたものであれば、たとえそれが何年も前に出版されていても、小さな本でも普通の本でも集めさせて下さい。なぜならこれらの本は私の蔵書を飾ることになるからです。」

〔挿図1〕

なお、文中のMは、  
Joseph Meder :  
*Dürer-Katalog*,  
Wien 1932  
の略記号である。



デューラー「哲学」1502年、B.130.コンラート・ツェルティスの『愛の四書』の標題の木版画